早稲田大学　政治経済学部
2016 年度　入試問題の訂正内容

＜政治経済学部　一般入試＞

【国語】

問題冊子９ページ：（三）　本文 25 行目

（誤）

～再現しているではなかろうか。

（正）

～再現している**の**ではなかろうか。

以上

早稲田大学 2016年度
一般入試 政治経済学部

国語

（問題）

2016年度

〈2016 H28100111〉

注意事項

1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。

2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。

3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。

4 マーク解答用紙記入上の注意

（1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。

（2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	◎悪い	○悪い
マークを消す時	○良い	◎悪い	●悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

（1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。

（2）所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。

（3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	
0	
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	

（4）受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

（例）

3825番

⇩

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。

8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。

9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）次の**甲**・**乙**を読んで、あとの問いに答えよ。

甲〔次に示すのは、菅原道真が大宰府へ流される途次で詠じた「自詠」（『菅家後集』所収）の作とその説明文である。〕

離家三四月　落涙百千行
万事皆如夢　時時仰彼蒼

〔説明文〕

「離家」の語の出典は、『楚辞』「九弁」の「去レ郷離レ家兮徠遠客」である。道真の詩篇には他にも「離家五日朝」「離家四日自傷春」の用例があり、「三四月」「五日朝」「四日」は［A］をいったものと理解される。

道真の詩篇には、涙に関わる表現を含んだ詩句は「自詠」を含めて三十余例ある。その中で注目すべきは、流れる涙に着眼した表現である。

X 読未三行涙数行

中国の漢楚興亡の時代、［B］面楚歌する中で、名高い「垓下の歌」を歌った項羽の目もとから流れる涙は「泣」字を用い、かつ動詞の「下」字を伴って「泣数行下」（『史記』）あるいは「泣下数行」（『漢書』）と記載された。道真の詠じた「涙数行」は項羽の流れを汲む表現にちがいない。

思君臥処涙双行

この「涙双行」は、涙が［C］眼［C］行ずつで、あわせて［D］筋の涙が流れることをいう。「涙数行」に比べて、理性的な表現でもあろう。

興味深いのは次の例である。

言之涙千行

「千行」とは、流れる涙の多さを、ひいては悲しみの深さを表現する。「自詠」の「落涙百千行」の表現は、「百」と「千」とを重ねて多分に念が入ったものといってよく、「百千行」は流される涙をとりわけ誇張した表現で、「［E］」というのにも近い意味をもつ。その「百千行」は、道真の奇抜な表現になるらしい。

「万事［F］」とは至上の幸福を祈っていうことばであるが、すべてに「［F］」なる生き方は到底あり得べくもなく、不［F］をかこつことも少なくはない。唐の李白の「春夜宴桃李園序」には、この世に生きることのはかなさを「浮生如夢」と表現したことが知られる。

『詩経』の「黄鳥」の詩は、秦の穆公に殉じて死んだ子車氏（秦の大夫）の三人の息子を悼んで国人が賦したものという。その詩中の「彼蒼者天（彼の蒼たる者は天）」の句に「彼蒼」の語があり、つづく「殲我良人（我が良人を殲せり）」の句には、天に対する国人の偽らぬ嘆声、哀訴の声を詠じている。

この「黄鳥」の詩篇を思えば、「彼蒼」を仰ぎ見る道真には、「万事皆夢の如し」と［G］眼差しがあると解される。この詩篇の存在感はことのほか大きい。

問一　問題文**甲**の説明文の空欄［A］に入る語を、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　出発した日時　　**ロ**　出発後の日数　　**ハ**　目的地までの時間
ニ　留守にする期間　　**ホ**　到着した日にち

問二　問題文**甲**の説明文の傍線部**X**「読未三行」の書き下し文を、**記述解答用紙**の空欄を埋める形で答えよ。なお、全て**ひらがな（現代仮名遣い）**で記すこと。

問三　問題文**甲**の説明文の空欄［B］・［C］・［D］にはそれぞれ数字が入る。**B**・**C**・**D**の三つの数字の和を、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　五　　**ロ**　六　　**ハ**　七　　**ニ**　八　　**ホ**　九

問四　問題文甲の説明文の空欄 **E** ・ **F** に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次の**イ**～**ホ**の中から一つずつ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

E　**イ**　清澄　　**ロ**　滴滴　　**ハ**　沸湧　　**ニ**　滔々　　**ホ**　滂沱

F　**イ**　如意　　**ロ**　退転　　**ハ**　知足　　**ニ**　公平　　**ホ**　得手

問五　問題文甲の説明文の空欄 **G** に入れるのに最も適当な文を、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　人生を諦観し、我が無実の罪を全て受け入れようとする

ロ　人生を甘受しつつも、我が無実の罪を晴らさんと訴える

ハ　人生を達観しきって、我が無実の罪を是認しようとする

ニ　人生を悲観しつつ、我が無実の罪に落ちた悲運を嘆ずる

ホ　人生を閑却して、我が無実の罪の怨みを忘れようとする

問六　次の**イ**～**ホ**の中から、菅原道真の作品が全く掲載されていないものを一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　大鏡　　**ロ**　懐風藻　　**ハ**　古今和歌集　　**ニ**　百人一首　　**ホ**　本朝文粋

乙〔次の文章は、菅原道真が失脚して大宰府へ流される途次までを描いた物語『菅家須磨記』の一節である。なお途中省略した部分がある。〕

左の大臣の、常に規式だちて、ものものに付けて目をとめ、眉をそばだつることの、公ならぬにはあらめやは。よそながら言ひ知らず、身の罪、横さまごとに上にも聞こしめいたりや。さりや、A うけばらせ給ふにはあらざらんを、七つの罪数へ上げさせ給ひ、弾正の尹の宮より、明法博士して懲らさるることの畏まり、むねとるべき人臣の家に、にげなくぞあるべきや。かう変はれる世のあらまし、いかならん世の例にもなしくださんを、つらつら思ふも、いはけなき世を思ひはかりけんぞ、悲しかるべきわざなるべし。されど心に思ふ節々、そのあがなひ申し聞こえ奉れる、上にも思し許りけるにや、その後は、ありしやうにこそ **1** 給はざりけれども、ついでついでの御顧みは、さりげなき面目なりけり。

高辻の館を仮の遷ろひ所に思ひものして、この頃のことに心離れし官退くやうになんして、遷ろひはべりし。苅屋姫と **2** は、家の孫のいとけなきなれど、かしこくも文字数へわたり、漢詩をすぐれて口にも誦んじ、手しても書き記いたれば、我が孫ながらも、この世の人とも覚えずなんありけり。白太夫といへる男、伊勢より年々訪ひ来たり。我が家の傍へなる宿を仮の宿り所となんせしに、この頃、また例の契り違へずして来たれるも、我が遷ろひ所を、とみのことのやうに危ぶめて、同じ住み家を占めなんとて親しみ寄れり。されど、遷ろひ所には思ひ憚ることもありて、醒ケ井の常楽院の僧房に遷ろはせたり。

今年も月行き、星移ろひて、春の草緑を告げ、庭鳥暖を報じて、良太賓が「閑流帯石池」と **3** しをも眼のあたりに誦して、つたなき腸を温めずといふに、この頃、孫の姫なるここに来たりて、屋柱の内なぐさめぬるこの句を、畳紙に書きてと **4** せめげば、しるしに、とみに与へぬ。やうやう花、梢稀にして、雪よりも匂ひなつかしくて庭に積れるに、また来む春の名残り、老いのまなじり露を浮かべぬるに、例の孫なる、ふところに畳紙を調ぜしを取う出でて、童しきまなこにも B 同じ筋に浮かべてなんかはかず。

天が下、政つべき身の、いかでかう、蓬生の住み処に、虫々、蛙と床を争ふことの本意無きや。異様なることは、世の中何しか変はりあらざらんや。夏はいとど狭き住まひのいぶせきに、ただ宰予(注1)が寝心のすさみにのみ、三伏(注2)をしのぐばかりなりけり。かくして秋風吹きわたりて、「井梧万天秋」と吟じて、御簾のただれに萩の葉のうち当てたるも、様変はりたる遷ろひ所、C ここには幸あるやうに覚えぬ。

九月の末つ方より、改官の解状(注3)下りぬると、いづくしも無き人の轉りありてなん。これらは身のおこたり、天道のし

かあらしむることと、かしこくも思ひ取りゐたるに、霜月の中の望の日、解状まことに下り、左大弁某、弾正の尹のしりへに候してはべると言ひ伝へ来たりぬれば、やがて本家に立ち帰りてその畏まりを承るに、大宰権帥に遷ろふべきとの詔、D まさしくも、おほほしくもはべれば、笏ささへして、いとどやうやうしうしぬ。

今年は塩瀬の嵐、波の立ち居もむくつけからんを、つとめての春にかの府(注4)にまかるべきとの弾正の尹の心づかひあれば、それにおこたるもつたなきやうなれども、今年はそのまま、もとの遷ろひ所に立ち帰りて、春を待つ間の心ばへ、丈夫の本意消えたるやうに、棟梁の器懸くべき身ならぬこと、心肝にも恥ぢがましくぞ日数を送ることよ。

さすらふる日も、睦月の二十日と解状定まりぬ。そこら家門のむねむねしからぬ、何くれと集ふるも、かしがましくやはある。からうじて、孫の女迎へんと、家門こぞりて言へば、涙しとどにものし、袖も袂も分いがたけらし。さは言へど、果して今日を離別の日となしなんとか。

すでに睦月二十日の寅四つばかりになん門出せよとて、看督長(注5)のつたなきらせめぎて、出で立つことよ。苅屋姫、白太夫の主を、須磨といふ所までと連れなひてなん。

君が住む宿の木ずゑを行く行くと隠るるまでにかへり見しはや（E）

苅屋姫、心地例ならぬよしを［5］に、典薬の史生和気重氏が［6］し船もあとに集ひぬるを招きてなん、薬のことまかなひて、その病つとめてはおこたりぬれば、海神の心ばへ取りぬる漢詩をなん、一つ二つ朗詠して行く。

淡路島も遥かに見わたさるるに、はや走らせし船も、須磨の関近う近づけてなん。浪、山を起こし、鯨などいふ鱗の長もここに現れぬべく、おどろおどろしう雷鳴りて、まづこの浦にと、からうじて着くに、碇といふものさへいづち取られて、危うきことたとしへなし。ここに着きぬる日は、はや夕日西に輝くとしもははべらねども、浪の光も晴れ行くやうなれば、何くれとせしままに、暮れ近うなり、そこら上野の岡といふ所、某の寺あるよしにて、鐘さえかへりて耳頭うれひをもよほせり。

つとめて、そこの掾(注6)かけたる橘季祐といふ男、こころざし漢詩にありて、僕がF かかる横ざまなる旅も、かへてては幸あることなど作りめぐむに、口づから誦して与へぬ。空の気色も晴れぬれば、すでに荒海の装ひ極まれば、苅屋姫をなん、乳母なる右衛門志にものして、都まで徒歩より送り返しぬ。

注1「宰予」…孔門十哲の一人。昼寝をして孔子に戒められた逸話を残す。
2「三伏」…陰陽五行説にもとづき、夏に猛暑となるとされる三日間。
3「解状」…ここでは処分に関する公文書の意。
4「かの府」…大宰府のこと。
5「看督長」…検非違使庁の下級の役職。牢獄の管理や犯人の追捕にあたった。
6「掾」…国司の三等官。

問七 問題文乙の傍線部A・D・Fの意味として最も適当なものを、それぞれ次のイ～ニの中から一つずつ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

A
イ 皮相な事柄に目くじらを立てられるわけでもないが、
ロ 差し出がましい行いだけはお控えになっていたが、
ハ 我がもの顔にお振る舞いになるわけではないが、
ニ 公平な判断を下されるはずもなかったのだが、

D
イ どう考えても、身におぼえのない事柄なのですから、
ロ 紛れもない、また気の重いことでもありますので、
ハ 厳しく、そして勿体ぶった措置でありますから、
ニ 正しいとはいえ、不確かな点もありますので、

F
イ こうして罪科を得た陰鬱な旅の中にも、必ず幸せが見出されること
ロ このような船を利用する迅速な旅行で、たいそう幸福であったこと
ハ こういった困難な船旅が、幸いにも同行者への配慮を厚くしたこと
ニ このように道理に合わぬこの旅も、彼には幸運な機会となったこと

問八　問題文**乙**の空欄 **1** ～ **6** にはすべて同じ動詞が入る。最も適当な語（終止形で示す）を次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　いふ　　**ロ**　なす　　**ハ**　はべり　　**ニ**　ものす　　**ホ**　ゐる

問九　問題文**乙**の傍線部**B**「同じ筋」とは何を意味するか。それを端的に表す漢字一字の語を、傍線部**B**以降の範囲に見出し、**記述解答用紙**に記せ。

問十　問題文**乙**の傍線部**C**「ここには幸あるやうに覚えぬ」の主語は誰か。最も適当なものを次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　左大臣　　**ロ**　弾正の尹の宮　　**ハ**　菅原道真　　**ニ**　苅屋姫　　**ホ**　白太夫

問十一　問題文**乙**の（E）の和歌をすべて品詞分解した時、ここに見出されないものを次の**イ**～**ホ**の中から二つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　動詞の連用形　　**ロ**　形容詞の語幹　　**ハ**　助動詞の連体形　　**ニ**　副助詞　　**ホ**　接続助詞

問十二　問題文**乙**の（E）の和歌について、（一）誰が詠んだ歌か、また（二）「君」とは誰を指すか、それぞれ**記述解答用紙**に答えよ。

問十三　問題文**乙**が描いているのは、どのくらいの期間の出来事だと考えられるか。最も適当なものを次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　一年のうち　　**ロ**　あしかけ二年あまり　　**ハ**　ちょうど四年半　　**ニ**　ほぼ五年にわたる
ホ　かれこれ七年ほど

問十四　問題文**乙**の内容と合致するものを、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　天皇は心の底では道真に同情したが、左大臣のかたくなな態度の前に、ついに道真を救うことはできなかった。
ロ　弾正の尹は道真が無実であることを承知していたので、処分が下されるまでの期間を引きのばすよう努力した。
ハ　大宰府への下向にあたり、道真は孫の苅屋姫と家臣の白太夫の同道を求め、朝廷から許可を得ることができた。
ニ　苅屋姫は馴れぬ船旅のため病を発したが、海神の怒りがその原因であったため、医師の治療も効果がなかった。
ホ　難儀に遭いながらようやく須磨に到着した道真は、見るもの聞くものにつけていよいよ憂愁の思いを深くした。

（二）次の文章は、加藤周一が永井荷風について論じた「物と人間と社会」（一九六〇年）の一節である（一部省略した箇所がある）。荷風は一九〇三年から一九〇八年まで、アメリカ・フランスでの生活経験がある。これを読んで、あとの問いに答えよ。

パリの印象派の画家たちは、江戸の木版画を、行きとどいて理解したから利用することができたのではない。彼ら自身の経験が、あらゆる道具を利用しつくさせずにはおかないほど激しかったから、たとえ理解を絶した遠い文化の結果でさえも、忽ち自己の目的に奉仕する道具と化したのだ。明治の油絵画家たちは、印象派の技法を充分に研究し、理解し、習得したはずだろう。しかもその技法は、ほんとうに彼ら自身の道具にはならなかった。いや、油絵の画家にかぎらない。明治以後の日本の知識階級の特徴は、西洋文化との接触のあらゆる機会に、新しい道具をその使い手との関係からきりはなして、抽象的に拾い上げ、研究し、分析し、利用しようとしたことだといってもよいだろう。それは勤勉で持続的な、ほとんど国民的な努力でさえあった。その結果は、今までのところ、学問・技術の領域では見事であり、文学・芸術の領域では見事でなかった。 **1** 。使用法の方法化された道具は、誰でも使うこと

ができる。使用法の方法化されていない道具は使用者の側での熟練や才能や個性的な条件によるところが大きい。

創造的な文化の領域では、道具と使い手とを機械的にきりはなすことはできないということになる。使い手はいうまでもなくその経験から出発するが、経験は常に直接には感覚的経験としてあたえられる。表現のための道具の選択やその使い方は、根本的には、使い手の感覚的経験の種類によって、影響され、方向づけられるだろう。道具を択んで使うという過程は、もちろん多かれ少なかれ自覚的に、知的な反省をとおして行われる。しかしその知的な過程を分析することによって――そこまでは合理的な理解の範囲である――、その過程の全体を方向づけ、意味づける感覚的経験そのものの質に到達することはできる。ところが今二つの文化が異質であるというとき、それは単に道具において、たとえばイデオロギーにおいて、異質であるばかりでなく、またそのイデオロギーを支える経験の質においても異質なのである。外国のイデオロギーの論理的な構造は理解することができるが、その構造を必然的に生みだしたはずの感覚的経験の質は、そもそも知的な理解の対象にはならぬだろう。西洋の文学と思想が問題ならば、西洋における感覚のあり方にまでさかのぼらなければならぬ。あるいは当方での感覚的経験の密度が、相手方の文学や思想のなかのしかるべき要素を自己の目的に奉仕させずにはおかないほど、濃厚でなければならぬ。

経験の質は、いうまでもなく、個人によってちがう。しかし個人によってだけちがうのではない。すべての人間の経験は、時空を超越した [2] な空間のなかで行われるのではなく、時空に束縛された特定の歴史的な空間のなかで行われる。たとえば一九〇〇年代の東京またはパリにおいてだ。[a] 知的な操作はその場所のちがいを超越することができる。しかし具体的で感覚的な経験は、そのなかで直接にあたえられるので、決してその環境を超越することができない。荷風西遊の意味もまた、つまるところこの一点に尽きるといっても過言ではないだろう。[b] その逆もまた同様であり、これは個人の意志の問題でも、努力の問題でもなく、まさに二つの文化の問題である。しかし二つの文化は、その歴史ばかりでなく、また現在の工業化の段階によって規定される。その意味で、荷風が外国に遊んだ当時のアメリカ東部の大都会とパリとの間には、大きなちがいがなかったとしても、たしかにパリと東京との間には、大きなちがいがあったはずである。[c] その後半世紀、日本の工業化は進んだ。今日本から西洋の大都会へ旅行する旅行者は、もはや荷風のように生活様式の著しいちがいを感じないだろう。生活様式が似れば、また当然ものの感じ方も似てくるにちがいない。おそらく今後日本の若い知識層が西洋の文化と接触する仕方は、従来の仕方と根本的に変ってくるだろう。たとえば西洋の文学も、もはや、何を感じているのかわからぬ人間の仕事としてではなく、およそ気心の知れた同時代人の仕事としてうけとられるようになるだろう。そういうことは知識や知的能力とは何の関係もないから、一九〇〇年代のフランス文学研究家よりも、五〇年代の学生の方がはるかに容易にフランス文学を理解するということもあり得る。今ではフランスの文学を荷風が身近かに感じた程度に身近かに感じるために、フランスへの憧れを必要としない。荷風がそれを必要としたのは、彼が五〇年まえに生きていたからだ。しかし工業的な社会が世界中のあらゆる大都会に、どれほど酷似した生活様式を生みだすにしても、そのことだけで、歴史的に異質な二つの文化のなかでの経験が、全く同質になるわけではない。[d] 二つのちがう言葉、二つのちがう宗教、二つのちがう歴史によって秩序づけられ二つの世界で行われる経験の質は、生活様式の相似、制度の相似にもかかわらず、根本的にちがう。そしてある特定の経験の質が反省的な過程を通じて生みだした概念的道具を、それとは異質な経験の分析や表現に役立てることはいつまでもむずかしいだろう。すなわち荷風の問題はのこる。荷風の問題とは、[3]。明治の日本の作家のなかでは、ただひとりの荷風だけがそのことを充分に理解していた。[e]

しかしどうして荷風だけがそのことを理解したのであろうか。彼と世界との関係は、常に感覚を通じてのみ成立するほかなかったからである。どうして彼と世界との関係は、常に感覚を通じてのみ成立するほかなかったのであろうか。

4 彼にとっての世界は、「物」であり、「物」は感覚の対象でしかないからである。もし彼が社会を外在的な物としてではなく、内側から参加する機構としてうけとっていたら、万事が変っていたはずだろう。しかし日本の社会からさえ脱れようとし、アメリカ社会のなかにさえ入ろうとしなかった人間が、フランス社会の内側へ入ってゆくはずはなかった。荷風のフランスは、憧れの対象としてはじまり、永久に憧れの対象であることをやめないだろう。憧れは内在的な願望の外部への投影である。フランスは常に彼の外部にあるほかはなく、彼はここでも、いわば人間の世界を失って、己が感覚をえたのだ。すなわちフランス滞在一年は荷風の感覚教育を完成したということになる。

問十五 空欄 **1** には、筆者が「今までのところ、学問・技術の領域では見事であり、文学・芸術の領域では見事でなかった」と考える理由が記されている。その理由を、五十字以上六十字以内で**記述解答用紙**に記せ。その際、次の条件にしたがうこと。

・「学問と技術に関しては」「文学と芸術に関しては」という二つの語句を、この順番で用い、「学問と技術に関しては、……、文学と芸術に関しては、……」という形式の一文でまとめること。

・行頭の一マス目はあけず、句読点や符号なども字数に数えること。ただし、文末の句点は打たなくてもよい。

問十六 第二段落（「創造的な文化の」以下の段落）には、本来の意味と反対の表現が使われているため、文脈上誤っている箇所が一カ所ある。その箇所を含む一文を抜き出し、冒頭と末尾の五字ずつを**記述解答用紙**に記せ。ただし、句読点も字数に含むこと。

問十七 第三段落（「経験の質は」以下の段落）には、次の一文が脱落している。［ a ］～［ e ］のどこに入るのが最も適当か。次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

荷風がパリにおける感覚的経験の質は、東京においては絶対にえられないはずのものであった。

イ a　**ロ** b　**ハ** c　**ニ** d　**ホ** e

問十八 空欄 **2** に入る最も適当な語句を、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ 感覚的　**ロ** 持続的　**ハ** 抽象的　**ニ** 内在的　**ホ** 必然的

問十九 空欄 **3** に入る語句として最も適当なものを、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ 道具が経験をつくることもあれば、経験が道具をつくることもあるということである

ロ 道具が経験をつくるので、経験が道具をつくるのではないということである

ハ 経験が道具をつくるのでも、道具が経験をつくるのでもないということである

ニ 経験が道具をつくるので、道具が経験をつくるのではないということである

ホ 経験と道具との間には、直接の因果関係がないということである

問二十 傍線部**4**「彼にとっての世界は「物」であり、「物」は感覚の対象でしかないからである」とはどのようなことか。最も適当なものを、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ 荷風が人間と物との関係を人間と人間との関係に置き換え、あらゆる物象のなかに人間の姿だけを見いだして、物語ろうとしたこと。

ロ 荷風が人間と人間との関係を人間と物との関係として把握し、自己の外側にある客観的な対象物としてのみ、享受しようとしたこと。

ハ 荷風が人間と社会との関係を唯物的なイデオロギーの立場から解釈し、経済的な価値観を唯一の基準として、理解しようとしたこと。

ニ 荷風が人間と文化との関係を具体的な芸術作品を基準にして考察し、とりわけフランスの芸術作品には、賛辞を惜しまなかったこと。

ホ 荷風が人間と世界との関係を日本・アメリカ・フランスの物質文化を通して描き、精神的な文化には、全く関心を示さなかったこと。

問二十一　問題文の趣旨と合致するものを、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　西洋の油絵を学んだ明治の画家たちは、江戸の木版画を学んだ印象派の画家たちと同様に、遠くかけ離れた文化と技法を貪欲に摂取したが、時代と環境の制約からその画材や道具を十分に使いこなすことができなかった。

ロ　外国のイデオロギーの論理的な構造を理解することは、どれほどその国に長く暮らし、生活感覚や経験を濃密にしたところで難しく、学べば学ぶほど異質な文化を実感せざるを得ないことになる。

ハ　荷風のパリにおける感覚的経験の質は、その時代や環境と不可分のものであり、二度と繰り返すことはできないから、今日からパリに旅行する学生が荷風ほどの深さをもってフランス文学を理解することはできない。

ニ　どれほど時代が変化し、工業的な社会になって世界中に酷似した生活様式が広がっても、歴史的な異質性を帯びている二つの文化のなかで、経験の質までもが同一になるということは考えられない。

ホ　荷風にとってフランスは常に憧れの対象であり、その社会の内部に入り込むことを強く希求したが、一年程度の限られた期間では社会を外側から知ることしかできないのを、彼は誰よりもよく理解していた。

問二十二　永井荷風の随筆作品を、次の**イ**～**ホ**の中から一つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　『一年有半』　**ロ**　『近代の超克』　**ハ**　『仰臥漫録』　**ニ**　『時代閉塞の現状』　**ホ**　『日和下駄』

(三)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

記憶力がよいとか悪いとかよくいわれるが、その記憶力に二種類の区別があることを知っているだろうか。一つは、村の古老が昔の出来事をよくおぼえているという、あの記憶力である。しかしこれは別に昔のこと、つまり長期的な記憶でなくてもよい。ごく最近の些細なことでもかまわない。要するに、物事の流れや筋道をおのずと記憶しているという、あの能力である。もう一つは、何かを積極的に記憶する能力、つまり簡単にいえば勉強のときに使う記憶力、いわゆる暗記暗誦の力である。この二つの記憶力は意志の有無に差があるだけで、おぼえていて思い出すというその本質において同じだといわれるかもしれない。しかし、どうだろうか。実際に即して考えてみよう。

たとえば学校で宿題が出て、次の授業までにある文章なり数式をおぼえていかなければならないとする。自分の部屋で一所懸命に勉強していると、隣近所から何かの物音か音楽が漏れ伝わってくる。あるいは遅くまで勉強している自分を心配して、母が夜食を用意してもってきてくれる。そうした物音や音楽のこと、部屋に入ってきて言葉をかけてくれた母のことを自然におぼえている能力と、いま必死に脳に刻みつけようとしている文章や数式をあとで思い出す能力とは、本来的に性質を異にしているのではなかろうか。前者は物事のなりゆきを［　1　］に記憶し、保持し、それをその時間的経緯にそって思い出す力である。それに対して後者は、物事を一まとまりの運動として扱い、それを［　2　］に繰り返して緊密に結合させ、あとでそっくり機械的に反復する力である。

この両者のちがいは、それらが欠落した場合を想定するとさらに際立つ。仮に前者を欠いて、後者の記憶力だけがあるとしよう。すると人間はつねに目先のことだけを考えているのではなかろうか。さきほどの例でいえば、［　3　］。すなわち目の前にあるもののなかから、自分に役立つものだけを拾い集めているのである。自分を効率的なロボットに仕立て上げているといっても過言ではない。ロボットには悪いが、そこには流れ去った時、あるいは役に立たず見過ごされたものに対する[4]愛惜の情は存在しない。

これとは反対の場合はどうだろうか。前者の記憶力だけがあって、後者が欠けている場合である。これはこれでまた、事態は明瞭であろう。［　5　］。出来事を受身で迎えるだけであって、努力し前進することができないのである。目の前のものはすべて、後で懐かしく思い出されるためだけに存在する。[6]そこでは何ものもパターン化されず、したがって何かのために利用されることがない。そのとき人間はその場の情緒に浸りきるだろう。それはまるで夢のなかの情景に圧倒され続けるようなものではなかろうか。

このように思考実験をしてみると、二つの記憶力のちがいは否定しがたいように思われる。しかしそれと同時に、この想定が非現実的であり、二つの記憶力の協働こそが本当の姿であることがわかってくる。大げさにいえば人間の人間たるゆえんは、この二つの記憶力の協働作業の賜物である。実際、二つの記憶力は別個に切り離されたものではなく、

相互に関連している。たとえばの話であるが、村の古老は若いころから何度も繰り返して同じような出来事に接し、同じような対応をしつつも、生活のなかで改善改良の努力を惜しまず、つねに周囲に注意深い視線を投げかけていたからこそ、長い年月が経過しても昔のことをよくおぼえているのだろう。そのことを理解するために、身近な例に戻ってもう一度考えてみよう。

子どものときに、百人一首を学校用に暗記暗誦したばかりでなく、家で実際に歌ガルタをして遊んだ人がいるだろう。大人になって振り返れば、その記憶は繰り返しの利かない人生を形づくる掛けがえのない一コマである。それは些細な一コマにすぎないが、その記憶を手がかりに、忘れられていたさまざまな出来事が一挙に懐かしく蘇るかもしれない。人生に意味があるのは、こうした思い出がいっぱい詰まっているからではなかろうか。そしてこれは、第一の記憶力の働きのおかげである。

しかしそれとはまた別に、百人一首の歌を先生や親にいわれて繰り返し暗記暗誦しなければ、カルタ遊びがそもそもできない。その場に流れる喜怒 7 の時間ばかりを気にしていて、おぼえるべき対象としての物事を反復し、整理し、定着しなければ、百人一首は記憶できず、国語の成績は急降下である。夢のなかで詠嘆しているようではだめなのだ。ただし、ここが肝心なところだが、第二の記憶力ばかりを合理的に働かせていると、子どもは可愛げのない優等生になるだけで、百人一首を歌というより記号の羅列として記憶し反復する機械と変わりがない。二つの記憶力が協働して絡み合い、あえて理想的にいうならば、学習の過程や暗記暗誦の各場面での友だちや先生や親の表情と仕草、学びの内容だけではなくその場の情景を含めた経験が刺激となり、自分から求めて読んだ参考書の語り口や文体までもが影響し、百人一首をめぐる文化の伝統が心身に流れこみ、その結果としてカルタが遊ばれなければ、学習する動物であり遊ぶヒトでもある人間の生きがいは無きにひとしい。

さて、村の古老などと先にいったが、これは昔話の次元にとどまらない。ここまで述べてきた二つの記憶力は、いわゆるアナログとデジタルに対応しているのではあるまいか。その点について最後に考えてみよう。一般にアナログとは、ある量またはデータを連続的に変化しうる物理量で表わすことである。もっと簡単にいえば、あるものをそれとは別のものによって類比的に、両者の似たところを通じて表現することだ。これは一秒二秒、一分二分という時の経過を、断続的な数字の羅列ではなく、時の流れのように連続的に動く針によって表わすアナログ時計のことを考えればすぐわかる。ところで第一の記憶力もまた、行動を目指して刻々と進展する知覚世界のありさまを、静かな観照に沈潜する記憶世界において、時の流れに沿ってアナロジックに再現しているではなかろうか。

第二の記憶力とデジタルとの対応は、デジタル技術におけるデータの集約圧縮と同じことが、暗記暗誦の反復過程を通じて行われていることからいえるだろう。どちらの場合でも不必要で余計なものはノイズとして排除される。そもそもデジタルとは、ある量またはデータを有限桁の数値（たとえば二進数）として表わすことである。いいかえれば、あるものをそれとは異なる別のものによって非アナロジックに表現することだ。データの集約と圧縮はそのことにより可能となる。似ているところに囚われてしまっては身動きがとれないのである。デジタル時計は連続的な時の流れを断続的な数字の点滅によって一気に示す。アナロジックであるということは気が休まるかもしれないが、 8 的であるということからは遠いのだ。

しかし、こうした対応関係が認められるならば当然、デジタルとアナログは対立し排除し合うものではなく、二つの記憶力と同じように協働するべきものだという結論にならないだろうか。アナログが 9 でデジタルが 10 だというのは単純すぎる二項対立である。アナログ思考が異なるものの間に類似点を見つけて世界をひろげ、新たなきずなを結ぶために大切であるとすれば、デジタル思考もまた、単に効率的というだけではなく、そもそも生命の原初的な働きに根差しているともいえる。集約と圧縮というその基本的な働きは、第二の記憶力と共通するものであった。ところで第二の記憶力は、個人の意識的な努力の局面だけではなく、そもそも「人類の目」ともいうべき地平で働いている。たとえば、一秒間に四百兆の継起的振動を生じている光線は、人間によって赤色として一瞬に知覚される。仮にその振動を刻々と意識的に知覚するならば、何万年もの時間が必要となるだろう。しかもそのとき人間の周囲に広がるのは、鮮やかな色彩に満ちた有機的な世界ではなく、灰色の無機的な平面ではないだろうか。ちなみに、私たちにとって燃えるように赤く見えるケシの花は、ミツバチには一種の白色としてあらわれているという。こう考えたときデジタルとアナログは、単なる情報処理方式のちがいを超えて、人間のいのちの両輪とさえいえるのではなかろうか。

問二十三　空欄 **1** ・ **2** に入る最も適当な語句の組み合わせを、次の**イ**～**ニ**の中から選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　1　感情的　2　理性的
ロ　1　合理的　2　恣意的
ハ　1　自動的　2　意識的
ニ　1　消極的　2　積極的

問二十四　空欄 **3** に入る最も適当な文を、次の**イ**～**ニ**の中から選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　心をひとつに集中させるのである
ロ　明日の授業にひたすら備えるのである
ハ　母親のように家族のことを気づかうのである
ニ　村の古老のように昔のことを忘れないのである

問二十五　傍線部4の漢字の読みをひらがなで、**記述解答用紙**に記せ。

問二十六　空欄 **5** に入る最も適当な文を、次の**イ**～**ニ**の中から選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　人間は現在を反復するただのロボットになっている
ロ　人間は過去と現在の区別を失って途方に暮れている
ハ　人間はもう物事を自然に思い出すことができない
ニ　人間はもはや繰り返して学習することができない

問二十七　傍線部6「そこでは何ものもパターン化されず、したがって何かのために利用されることがない」の意味として最も適当なものを、次の**イ**～**ニ**の中から選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　すべてのものが独自で固有な存在としてあり、したがって他のものの手段となることがない。
ロ　すべてのものがてんでばらばらに存在し、したがって取捨選択することができない。
ハ　あらゆるものが声高に自己主張して統制が取れず、したがって優劣を決められない。
ニ　あらゆるものが新鮮さをいつまでも保ち、したがって再生利用されることがない。

問二十八　空欄 **7** に入り「喜怒」とともに四字熟語をつくる漢字二字を、**記述解答用紙**に記せ。

問二十九　空欄 **8** に入る最も適当な漢字二字の語句を、それに続く段落（「しかし、こうした対応関係が」以下の段落）の中より見いだし、**記述解答用紙**に記せ。

問三十　空欄 **9** ・ **10** に入る最も適当な語句の組み合わせを、次の**イ**～**ホ**の中から選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　9　低級　10　高級
ロ　9　現実　10　理想
ハ　9　機械　10　電子
ニ　9　感性　10　理性
ホ　9　自然　10　人工

問三十一　次の**イ**～**ホ**の中で本文の趣旨に合致しないものを二つ選び、**マーク解答用紙**に答えよ。

イ　実生活を効率的に生きて未来を目指すことと、過去の遺産を大切にして情緒ある生活を送ることは、なかなか両立しがたいものである。

ロ　その場の雰囲気ばかりを大切にして人生を過ごしていると、前進して未来を切り開いていく意欲に欠けることにもなりかねない。

ハ　データの集約と圧縮はなにも特殊な技術ではなく、生きる上で人間がつねに無意識のうちに行なっていることである。

ニ　アナログとデジタルは相異なる技術からなる以上、目的を考えて別々に利用することが賢いやり方である。

ホ　自分の役に立つことだけをいつも考えていると、潤いのある人間的な時間を見失うことになりかねない。

〔以　下　余　白〕

国語　記述解答用紙

解答はＨＢの黒鉛筆またはＨＢのシャープペンシルを使用のこと。
解答用紙には、解答欄以外には何も書いてはならない。

(一)

甲　問二　よむこと

ざるも

乙　問九

(二)

問十二

(一)

(二)

問十五

(三)

問十六

問二十五

問二十八

問二十九

〈2016 H28100111〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定の欄以外に番号・氏名を書いてはならない。

国語　採点欄

（この欄に書き入れてはならない）

(一)

問二

問九

問十二

(二)

問十五

(三)

問十六

問二十五

問二十八

問二十九

〈2016 H28100111〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

（注意）所定の欄以外に番号・氏名を書いてはならない。